

フレネ教育における学習環境の考察

—オランダ・ベルギーのフレネ学校を事例に—

Consideration of learning environment in Freinet education

—Case studies of Freinet schools in the Netherlands and Belgium—

猶原和子*, 渡辺行野**

【要約】

セレスタン・フレネ(1896-1966)は、子どもを学校の中心に据え、想像と表現を重視し、個と学校共同体と社会とのつながりの中で実践を深め、民主主義の担い手となる「市民」を育てる実践を展開したフランスの教育者である。今回、5つのフレネスクールを視察し、フレネ教育の特徴である学校印刷をはじめとした学習環境の設定が、政治的社会的実践を営むのに大きな意味を持つことがわかった。

[キーワード] フレネ教育 手仕事 フレネ技術 個別化と協同化, コミュニケーション

1. はじめに

1989年、南仏の小さな田舎町ガールの農家に生まれたセレスタン・フレネは、教員養成課程を履修した後、1916年第一次世界大戦の激戦地であるヴェルダンの戦いで肺に重傷を負う。

やがて、1920年、公立の貧しい子どもたちが通うパール・シュル・ルーの小学校教師となる。当時のフランスは権威主義・強制主義・暗唱主義・体罰主義の教育を行っており、戦争で肺を負傷して大声で叱ることもできないフレネは、いわゆる落ちこぼれ教師であった。しかし、だからこそ彼は子どもを注意深く観察し、権威や大人の圧力から子どもを開放し、子どもを中心においた学校を目指したのである。

フレネは、ルソー、ペスタロッチ、モンテッソーリ、フェリエール、デューイ、クラパレド、ドクロリーなどの数多くの書物を読み、目の前の子どもたちにとって意味のある学びを考え続けた。

「子どもは自分が役立ち、自分に役立ってくれる理性的共同体の内部で自己の人格を最大限に発展させる。」

彼はまず、教室の教壇を取り払い、「教える教師」と「教わる子ども」という関係を改めた。そして、子どもの生活から生まれる興味・関心を教室に持ち込み、ともに聴き合い、吟味しあい、相互評価しあって、表現を高めていった。個々の子どもの興味が多様に行き交いながら、協同的な営みを通して複合され、社会化していくこと、市民として育つことを大切にしたい教育を目指したのである。

1927年、フレネは「学校に印刷機を！」をスローガンとする、公立学校の現代教育運動を始める。「自由テキスト」や「学校印刷」「学校協同組合」など、いわゆる“フレネ技術”と呼ばれるものはスペインやベルギーをはじめ瞬く間にヨーロッパに広がっていった。さらに学校間通信によって、異なる地域の生活が教室に生きて持ち込まれ、子どもや教師の連帯が強まり世界を広げた。

現在、フレネ教育は世界40カ国以上で行われ

* 江戸川大学こどもコミュニケーション学科 教授

** 文京学院大学児童発達学科 助教

ている。FIMEM（現代学校運動国際連盟）によって、RIDEF（フレネ教育者国際集会）が2年に一度開催され、そこにはヨーロッパだけでなく南米やアフリカなど世界各国から多くの教育者たちが集まり、それぞれの教育実践が語り合われている¹⁾。

本稿は、2018年9月と2019年3月に訪問したオランダとベルギーのフランドル地域のフレネ学校での視察をもとに、フレネ教育における学習環境について考察するものである。

2. フレネの考えた学習環境

2.1 個別化と協同化

フレネは「ますます複雑化していく社会に子どもたちを立ち向かっていかせるためには、個人的であると同時に協同的であるような形態で進められる差異をもった教育が我々に必要となる」と述べている²⁾。

個別学習と協同学習は対立的に用いられることが多いが、そうではない。彼は「個別化された学習は、それが協同的な社会生活に統合された時にのみ意味を持つ」ことを強調している。みんなという名前の集合体のために、個人的な思考を犠牲にすることに警鐘をならす。芸術的・文化的なデリケートな作品は常に個人的な表現であり、それが安心でき、信頼しあえる関係の集団の中で互いに批評し合い、触発しあって高まっていくのだと考えていたのだ。

個別学習を支えるために、フレネは仲間とともに「学習文庫 (B・T)」を発行した。B・Tとはフランス語のビブリオグラフとトラバイユの二つの頭文字である。Travailはworkにあたり、広い意味を持つ。B・Tは子どもたちの生活から生まれた作品を、教育者や専門家が加わって本の形にして、学問的に深めたものである。それが刺激になって、子どもたちが自分でもっと先へ進んでいくための道具として、理科や社会の事柄を、どこまでも広がっていく可能性を持ったものとして考えられた。

このほかにも、「計算とフランス語の自己採点カード」や「歴史・地理、科学のガイド・カード」など、個別学習を支えるプログラム化され



写真1 様々なBT (CELより出版)

たカード群が次々に作成された。アメリカのスキナーらのプログラム学習はこれより後だったことを考えると、フレネたちが次々と体系を整えていったことは、驚くべきことである。

その一方で、これらのプログラムの使い方に対して危惧していたところもある。1965年、亡くなる前年のフレネと会った波多野完治は、フレネがスモール・ステップは大変問題であると言っていたと指摘している³⁾。スキナーらの考え方は少しずつ順を追ってやっていくことを重視しているが、フレネやピアジェは「生命は飛躍する」という考え方である。人(子ども)は同じような時期が続くかと思えば突然飛躍することがある。飛躍の前には逆戻りや失敗もあり、その子によって進め方、飛躍の仕方は異なるという捉えである。フレネらが作成した学習材はスモール・ステップではなく、その子の学びの道筋に応じて自由に展開の仕方が変わるものだったことを押さえておくことが重要であろう。

2.2 教室はアトリエ

フレネは教室を子どもたちが自由に活動できるアトリエ(作業室)に作り替えていった。彼は自然と手仕事を大切にした。

フレネ技術と呼ばれる「自由テキスト」「学校印刷機」「子どもによる研究発表(コンフェランス)」「協同組合」などの中で、フレネ教育の出発点であり、重要な柱となるのは「自由テキスト」である。教師の指示で書かされた課題作文とは異なり、子どもの側から自分の興味や生活を自由に表現したテキストであり、作文だけでなく、口頭表現や身振り、ダンスなどの表現、

デッサンやイラストによる表現なども含まれている。

さらにフレネたちはB・Tや学習カードづくりなど、個別学習と協同学習を調和させる教育技術を開発させていった。

「手仕事を学校へ」の中で、フレネは乳児期から小学校までを4期に分け、子どもを取り巻く環境について述べている。幼稚園での自然や飼育、読みやデッサンなどの重要性と学校印刷についても述べられているのだが、ここでは小学校部分を取りあげる。

幼稚園と同じように畑などの外のアトリエと自然の採光や暗くすることのできる室内のアトリエが必要だとしたうえで室内の8つのアトリエについて、次のように述べている。

- ① 基礎的な手仕事のための4つのアトリエ
 - ・畑ごと、動物飼育
 - ・鉄工と木工細工
 - ・製糸、織物、裁縫、料理、家事
 - ・建築、機械、商業
- ② 選んだ活動、社会化・知性化された活動のための4つのアトリエ
 - ・下検分、知識、資料のアトリエ

学習文庫や地図、地球儀、蓄音機、レコード、映写機とフィルム、辞典などが置かれ、学習計画表や自己採点カードを用意する。
 - ・科学実験のアトリエ

自然・物理・科学の実験装置や器具、植物誌や動物誌、顕微鏡や拡大鏡、気象観察機器、電気設備を用意する。
 - ・文字記号による創造。表現、コミュニケーションのアトリエ

複写機や謄写版、タイプライター、可能な限り質の良いもの。
 - ・芸術的創造、表現、コミュニケーションのアトリエ

リノリウム版画用の教具、蓄音機、唱歌やダンス、リズム遊び用のレコードや絵の具、粘土等。

このように、自由に出入りできる開放的なアトリエでの仕事（学習）を通して、フレネは子どもが自然に豊かな学びを獲得していくことを

目指した。なかでも、印刷機の導入は、子どもの自由な表現を保障することはもちろん、印刷への役割分担や運営管理など、協同的で社会的な活動となっていた。宮ヶ谷は次のように述べている。

「自由表現、自由テキストによる豊かな言語能力の獲得、自主カリキュラムに基づく個別学習、個別学習の協同化としての研究発表、生徒によるコンフェランス、集団的調査、研究、学校間通信や交流……。こうしたフレネ技術もが協同組合による学校生活の協同化、集団的規律を基礎として開花するものなのだろう。これを自主管理と呼ぶ人もいるが、教師の役割も重要なのであって、教師と子どもによる共同管理と呼ぶのが適切であろう」⁴⁾

手仕事を重視し、個々の興味や生活をつないで協同化していくというフレネの教育法は、フランス語のわからない子や、発達に課題を抱えた子どもにも有効であったという実践報告がある。フレネは自由な表現を保障し、子どもも教師も信頼し、それぞれに適した技術を用いることのできる環境の中で、民主的で自由な市民を育てていこうとしたのである。

3. オランダにおけるフレネ教育

では、現在のフレネ学校ではどのような学習環境を重視した教育が行われているのであろうか。

今回はオランダにあるフレネ学校7校の内4校と、オランダのフレネ教育協会とともに運動を進めているベルギーのフランドル地方の中の1校の視察をもとに考えてみたい。

3.1 オランダ、ベルギーのフレネ教育の現在

オランダは、子どもの幸福度No.1の国として知られ、最近ではオランダでのイエナプラン教育が日本で通目されるようになってきた。オランダでは1975年に国立カリキュラム開発研究所(SLO)が設立。76年以降、教員養成大学にイエナプランやフレネなどのコースも付設されていた。(現在フレネのコースは置かれていない)。

1981年に『新初等教育法』が制定された。幼

児教育と初等教育が統合されて柔軟な教育内容となり、理科社会は統合し、「ワールドオリエンテーション」となった。もともとオランダのイェナプランで考案されたが、現在はすべての学校で行われている。初等教育から高等教育にいたるまで、子ども自身の自立心や協同性を重視した、個別教育が主流なのが特徴である。

また、多様な価値の尊重、「世界市民」を目指した「インクルージョン」の概念をもって教育が進められている。世界で最初に同性婚を合法化した国でもあり、性教育にも積極的で、幼児期から教育に取り入れることが定められている⁵⁾。

現在オランダには、7校のフレネ学校がある。1975年にアムステルダム派とデルフト派で一旦分裂したが、1998年に再統合。フレネだけでなく、オルタナティブの考え方が公教育にも影響していることがオランダの特徴である。また、オルタナティブの学校経験者を優先して採用する学校も多いことから、それぞれの親和性は高いといえる。

また、ベルギーのフランドル地域は、2009年からオランダのフレネ教育の人たちと一緒に活動しており、2016年にフレネ教育協会が統一して作られている。急速にフレネ教育が発展している地域であり、2年前は70校であったが、現在では100校を超えている。

視察先は次の5校である。

Parkschool Delft (デルフト)

www.parkschooldelft.nl

Freinetschool Delft (デルフト)

www.freinetschooldelft.nl

De Bothoven Enschede (エンスヘーベ)

www.freinetschool.nl

Nieuwe Regentesseschool Utrecht (ユトレヒト)

www.nieuweregentesseschool.nl

Freinetschool De Pientere Piste (アントワープ)

www.pienterepiste.be

3.2 視察したフレネ学校の学習環境

ここでは、子どもを主体とし、子どもの「自由な表現」を大切にした教育実践であるとされているフレネ教育を取り入れた学校の学習環境

について詳述する。

【学校印刷】

参観したどの学校でも、生活の中にある子どもたちの言葉や語りを印刷するという営みが現在も大切にされていた。ユトレヒトの前校長 Marijke は、「活字を拾い、印刷すること、その作文に版画や絵を加えていくこと、その準備から片付けまでの活動すべてが協同して営まれるものであり、とても重要。だから低学年はもちろん、高学年の教室にも器具を置いている」と、古い印刷機を愛しそうに見つめながら語った。

印刷場所には、昔から残されている古い機械が置かれ、文字がずらりと並んでいる。レゴのスタンプを使用している学校もあった。版画用のインクや紙も整然と並んでいる。子どもたちの言葉は、これらの印刷機を用いて印刷され共有されていく。

一連の印刷活動を通して言葉への愛着が生まれ、自然と言葉を通じた自己表現する学びを得



写真2 文字を並べた文章 (印刷機) ユトレヒト



写真3 版画の印刷 エンスヘーベ

ていくという。また自分の作文や日常のレポートが印刷されることによって、学級において承認されることも、一人ひとりの子どもたちの自信に繋がっている。

Marijkeのいうように、フレネが大切にしたい、個別の表現が、協同作業を通して共有のテキストになり、社会化されていくのだと感じた。

【自由作文 (テキスト)】

子どもたちの生活や子ども自身から生まれる言葉や表現を学習の中心とする学びは、フレネ教育の特徴でもあり、これらの活動から広がる学びが一人ひとりの探求や研究へと繋がることから自由作文の意味は大きい。アントワープの校長Judithは、「自由作文から私たちは、設定目標および学習プログラムの主題に到達する」と述べている。フレネ学校の子どもたちは、子どもが見たものや感じたもの、考えたこと、発見したこと等を自由に自己表現する。そこに描かれた内容をもとに学びが展開される。

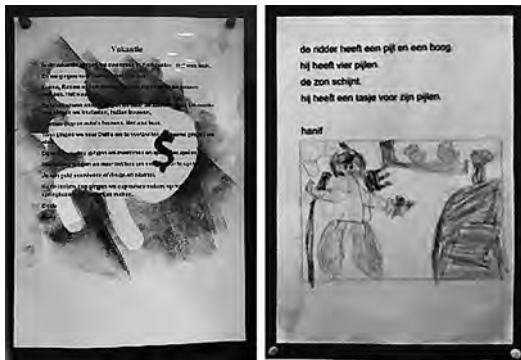


写真4 自由テキスト デルフト

作文には、子どもたち一人ひとりの生活場面が素材となっており、個人の作文として記録に残し、そのことについて仲間と発表しあったり討論しあったりする。それが自らの探究や研究、皆で取り組むテーマ学習に繋がることもある。

これらの子どもの記録は、生活の中で常に目に触れられる場所に掲示したり冊子にしたりして子どもたちの手の届く場所に保管されている。ユトレヒトでは自由作文用のノートが作られており、それはポートフォリオとしての役割も持っている。

子どもたちは、自分たちの自由作文や学習記録の蓄積にとっても愛着を持っており、大切なモノを愛しそうに紹介していた。



写真5 学習記録を紹介してくれる姿 ユトレヒト

吹き流しを使ったアート作品の上に、詩をパソコンで打ち出した作品もあった。このほかに写真を用いたものも多くあり、自由作文の表現も多様になっていた。

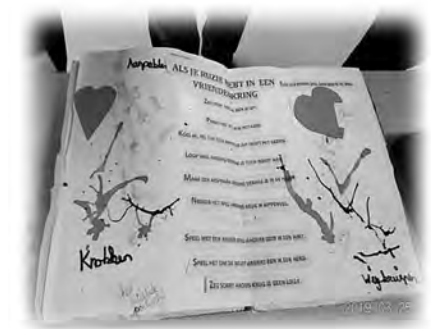


写真6 自由作文 アントワープ

【個別学習を支える環境】

子どもが見通しを持って自らの学びを進めていくためには計画表が有効である。学習の達成目標や期限も設定されている為、それらに間に合うように自分で計画を立てていくことも大切な学習の一つである。

訪問した学校によって、その扱いは大きく異なった。1週間から2週間の計画表にするとところもあれ



写真7 学習計画表 デルフト

ば、計画表は作らず、週に数回、その日の計画を朝にたてるという学校もあった。

エンスヘーデの校長 Marjan は、「1 週間の見通しはまだ難しい。この子たちには今日の計画が妥当だと考えている」と語った。子どもの状況に応じて変化させることも重要である。

個別学習は各自好きな場所で行われる。廊下で静かに行ったり、友達のを借りたり、教師の助言を受けたりすることもある。

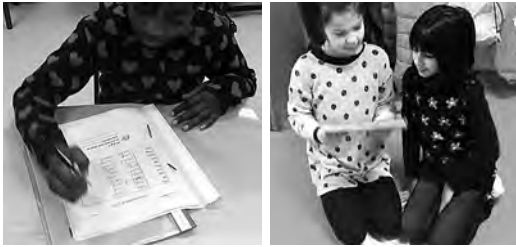


写真8 好きな場所で学ぶ アントワープ

Marijke は「子どもたちは学ぶための好奇心を持っている」と話していたが、子どもたちが探究や研究を深めるために必要となる情報や資料があらゆる所に存在していた。手に取ってみると、学習カードや学級文庫等、CEL が作成していたフレネ独自のものは異なるが、市販で同じような機能を持つものが活用されている。

子どもたちにとっての仕事場（アトリエ）は、伸び伸びと自分らしく生活している場であり、子どもの学びを支えている。また、場に共存する教師の姿も同時に意味を成す。一人ひとりの別々な活動を把握し、支援しながら時として指導に入る教師の資質・能力も子どもの学びを支える上で、重要な役割を担っていると考えられる。



写真9 様々な学習道具が入っている Box

【学級・学校自治】

フレネ学校の子どもと教師の間には信頼関係が見られ、大人を尊敬しながらの距離の近さは見ていても心地が良い。大人に頼りつつも自分たちで学校を組織しようとする意思が、学校案内の際の言動に表れていた。子どもを信頼するからこそ、自分たちの言葉で語らせる教師の姿勢もそこにはある。

ユトレヒトの学校では、教室の階段を上ると子どもの意見を反映させた屋根裏部屋があり、ソファや PC、読書など、思い思いの時間を過ごすこと出来る居心地のよさそうな空間が、回廊のようにつながっていた。

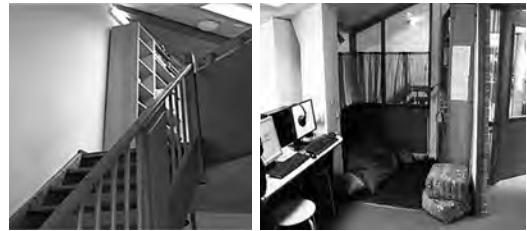


写真10 子どもたちが提案した空間設計 ユトレヒト

また、教室の自治組織で話し合い、自分たちに必要なクッションを購入したクラスもあり、「フレネはお金の使い方を教える」とリヒテルズが2年前に話していたのを思い出した。

大人たちの主体的活動もある。理事会には保護者も加わり積極的に意見を交わし、それが公開されているし、子どもたちと共に活動すること



も多い。夜、学校を布で覆うアントワープで保護者の勉強会を開いたり、環境問題を考えるために小さな小屋を保護者で作り、暖めるための工夫を提案したりするものもあった。

このように、現実社会の問題を意識化する活動を大人が連帯して働きかける中で、子どもたちはより自分ごととして社会を見つめるのである。

【多彩な顔を持つ教室】

2学年ずつの異年齢集団の教室は教師と子どもによって、独自の空間を作っている。タイプの異なる様々なエリアがあり、あるクラスでは月と太陽をイメージした空間や絵本の世界に入りこめるような居心地の良い落ち着いた空間などがあった。印象深いのは光である。室内は、優しいオレンジ色で灯され、窓から外の光が優しく差し込むように工夫されていて温かい雰囲気包まれていた。

安心できる場所・空間が工夫されている。机の形も様々で、椅子の向きも中心に向いているものもあれば、窓側に向き、イヤーマフなどが置かれ「自分の世界」に入りやすい場もあって、選択できるようになっていた。

【自然、手仕事、芸術のアトリエ】

今回訪問した学校は、畑や近くに広い公園が



写真12 様々な顔を持つ教室空間

あるところが多く、フレネが大切にしていた自然と親しむ活動が大切にされていた。エンスヘーベでは保護者による自然の素材を活かした遊具が校庭に置かれ、ぬくもりがある。自然に触れることから得る学びは大きい。

ユトレヒトやアントワープのような都市では、博物館や美術館などの施設も積極的に活用していた。Judithは、「学びは疑問から始まり（興味関心・モチベーション）、どのように機能し、組み合わせられるのかという動機が生まれ（知識の構造化）、疑問の態度を刺激し、質問に対する答えを見つける方法（学び方を学ぶ）」だと述べた。彼女自身、なるべく外に出かけていき、地域を探検することを心掛けていたという。そうすることで「隣人と接触し、様々なことを子どもたちと思索することができる」と語った。

また、多目的なアトリエでは、身体表現や音楽活動（ドラムが多く用いられていた）が行われていた。エンスヘーベの学校にはグリーンスクリーンが置かれ、子どもたちが動画製作に用いているとの話であった。低学年の各教室にはイーゼルが置かれ、いつでも描くことができるようになっている。そこで生まれた作品は、校内のあちこちに展示されている。

中高学年ではPCやアイパッドも置かれ、ホワイトボードも活字印刷も、子どもたちは必要に応じて選択して当たり前のように扱っている。



写真13 子どもの作品

作品が丁寧であることにも驚く。難民も含め、荒れたタッチの子ども作品が変化していくのは、日々の教室での営みが安心できる環境だからなのかもしれない。

4. 考察

4-1 フレネの理念を引き継ぐ環境設定

5つの学校を視察して、先生方一人ひとりが自分の言葉でフレネ教育について、深い理解をもって語られることが印象的であった。

オランダではフレネの著書はもちろん、オラ

ンダでのフレネ教育の実践書も数多く出版されている。オランダにある7つの学校は2017年に子どもの姿を中心に自分たちが大切にしているフレネ教育の理念を伝える『Freinet Binnenste Buiten』というタイトルのパンフレットを出版している。

その最初のページには、幼児が大きな文字を並べ活字印刷している写真とともに「教育の出発は経験」とある。他のページにも「実験の手探りと発見が特徴」「仕事は意味ある文脈で行うべき」「民主的な協議」「子どもたちはクラスの運営を自己管理」「教師と計画を立てて仕事(学習)を進める」「大人も含む仲間との文化共有」「持続可能な社会を発展していく現代学校」といった言葉とともに室内や室外での様々な活動場面が描かれていた。

アントワープのJudithも「学習は行動し、探索しそして発見すること」、「自分自身で試すこと」、「子どもたちの仕事は彼らにとって意味のある文脈で行われる」と話している。自分の手を使うことや身体で感じることを表現していくこと等の様々な体験を通して、自らの学びを深めていくことが重要であると、フレネの精神を引き継いだ言葉で語っている。

環境設定の中で、特に注目したいのは次の3点である。

① 手仕事：学校印刷の意義

自由作文(テキスト)はどの学校でも行われていたが、活字を拾い印刷する行為が学びの基本にあると感じた。自分の思いを表現するために、言葉を文字にしていく営みに、文字を探し、単語にしていく行為は、とてもわくわくする行為である。古くから用いられていたと思われる文字板や、単語にまとまりやすいようにレゴの形で作られたもの、大きさも年齢に応じてさまざまであったが、きれいに整えられ、誰もが使いやすいようになっていた。

興味深いのは、掲示された作品や各学校が作成しているカレンダーの絵となっている自由作文をみると、その多くが版画であることだ。フランスのヴァンスにあるフレネの建てたフレネ学校では、訪問するたびに活字印刷の道具が教室から消えていき、現在は幼児クラスだけで、

パソコンでの作成が多い。また、作文に添えられる絵も版画は減り、写真が増えている。オランダでは、タブレットやパソコンなども積極的に活用する一方で、自由作文での活字印刷に対する熱意は強く、特徴的だといえる。

② 個別化と協同化

子どもたちが主体的に学習を進めていく上で、一日のスタートとなる朝のサークル対話や帰りの集まりは、仲間と共に落ちついた気持ちで話し合う時間として重要な意味を持つ。

子どもたちは、聴き合い伝え合う経験を通して自分の意見を整理して主張することと共に、仲間(他者)のことを知る機会やその意見の相違を相互理解したコミュニケーション能力を身につけている。日頃から取り組まれているこうした活動が、感じたことや発見したこと、学んだことを文章や絵に表現していくこと、子どもたちが疑問に感じたことや学びたいことを自ら主体的に調べ、その内容を記録していくことにも繋がっていく。

「ワールドオリエンテーション」と呼ばれている総合学習に、その特徴が表れているように感じた。個人で興味・関心を持ったものや疑問に思うことがテーマとなって主体的な調べ学習へと繋がっていたのである。

オランダでは、おおまかな学習内容が決まっており、別な時期に参観した学校では、日本の総合的な学習が陥ったように、毎年同じような形で設定されたテーマが教師からだされ、そこから分かれる形になっていて、ドクロリーの「興味を中心」と同じようだと感じた。しかし、ある低学年クラスでは、一人の子どもが語った「骨」の話から、『人体』へと発展し、幼稚園では先生の『結婚』、高学年では『性教育』へ広がっていた。個々の問いや興味が複合されていく総合学習であり、実際このような広がりのある学習が望ましいと、MJスクール(Mはモダンで現代教育運動であるフレネ教育を示す。イェナプランと二つのよさを生かす学校)も新しく登場している。

かつて、最初にワールドオリエンテーションを作り出したケース・ボットは「フレネの教師はより力量が必要」と述べた。子ども一人ひと

りに合った学習に応じて的確に対応し支援するとともに、それぞれの子どもの特性を見抜き、能力や可能性を引き出し、複合して意味ある学びに紡いでゆく。そうした教師の力量はフレネ教育を行う上で確かに重要だと改めて感じた。

エンシュヘーベの校長は、「昔はもっとゆったりと個別学習の時間をとっていたのだけれど、今は子ども自身が選択する時間が多かったが、学習目標を達成するためにグループで行う時間が増えてきた」と語っていた。初等教育修了時に言語と算数の達成度テストが導入され、その結果はすべて公表される。幼児クラスにもかなり細かい「達成基準」が設定されている。これはオランダだけでなく、世界の学校全体が面している課題かもしれない。

4-2 市民的資質を育てる環境

① 異なる立場の大人の連帯

オランダでは、公立私立を問わず、一人当たりの子どもに対しての国の援助は同じである。200人以上の子どもが集まれば学校を設立できる。エンシュヘーベの学校は150人だが、地方ではこのような小規模校もあるという。この学校は公的な予算のほかにコンセントという基金の援助を受けており、学校評議会には関係者も加わっている。この基金はモンテッソーリやイエナプラン校も援助している。国全体が教師不足に苦しんでいるが、フレネ学校では「できる限りオルタナティブ校に勤めた経験者を求めている」と語っていた。

ユトレヒトの学校は保護者と教師が、一度廃校になった学校を新しく再生したものであった。校舎建築にはシュタイナーの設計者が関わっていた。

デルフトのパークスクールは、社会的役割の異なる機関が一か所に集まっているワイドスクールで、文化施設やスポーツクラブ、学童保育が入っていた。

このように、学校に関わる大人がフレネ教師だけでなく、様々な立場の大人たちが行き交い、異なる視点から議論する場をもっていることは重要である。フレネ教師同士の研究会も活発に行われているが、素晴らしい教育を生み出すに

は、教師はもとより社会に存在する全ての大人や子どもの融和的・補完的なコミュニティが重要なのである。

「イエナもシュタイナーも、スティーブ・ジョブススクールも同じ街にあるっていいと思わない？ 自分にとってよりよいところを選べるのだから」と微笑んだ校長の言葉は大きい。子どもは教師と保護者だけでなく、地域で異なる立場の大人たちがともに連帯して育てていくのだ。

同じテンポで同じ年齢の子が画一的に学ばされている日本の教育は、いよいよ考え直す時期である。一人ひとりの教師力量はとても高いといわれている日本の教師が、やりがいや満足度が低いのは、異なりを認め合い、自由裁量で子どもと一緒にクリエイティブな学びを生み出す活動を制限されているからだと思わずにはいられない。

② 教育は政治的、社会的、文化的実践

どのフレネ学校も、自分自身の手を使うことや身体で感じることを、表現していくこと等の様々な体験を通して、自らの学びを深めていくことを大切にしていた。

その中で特に心に残っているのはアントワープの先生方の「社会への目の向け方」である。教室には何色ものめがねの絵が掲示してあり「様々な視点から見直そう」という働きかけがなされていた。また、高学年の教室には「進んで選挙に参加しよう」という意見とともに、トランプに対する痛烈な批評も掲示されていた。

校長のJudithは「疑問と研究は、議論ラウンドから始まる」と話している。子どもを主体とした子どもたちの自由な表現を大切にしており、意見を伝え合う・交換し合うことを重要視している。一人ひとりが自由と責任を感じながら、しっかりと社会に目を向けている姿が感じられる。

環境問題はどこの学校でも重要視していたが、ベルギーでは、ブリュッセルで何万人もの生徒が参加した抗議デモが行われたこともあって、アントワープの学校でも、幼児クラスは学校の周り、高学年はもっと公的な場所で意思表明をする行動をとっていた。

フレネが目指したのは調和的で自律した市民の育成である。学校は生き生きとできる楽しみ

の空間であると共に、心から安心できる居場所であり、常に社会と切り離されたものでなく、自分たちが社会を生み出す一員であることを自覚していく場所であり、多様な価値観や考え方を受け入れる開かれた場所であることが必要だと感じた。

改めて、学校は何をすべきところか。

レッジョ・エミリアの教育に詳しいピーター・モスは、「幼児教育は政治的・倫理的実践」であると述べ、佐藤学は加えて「社会的、文化的実践だ」と述べている⁶⁾。レッジョに大きな影響を与えたフレネの実践はまさに理性的共同体を育てる政治的・社会的実践である。さらに環境の整備から見えてくるのは文化的実践である。そのことを、オランダやベルギーの先生方がはつきり意識して実践されているところに驚かされた。

5. おわりに

今回訪問したフレネ学校は、いずれも異年齢の子どもたちが一緒に活動する縦割りクラスであった。先生方は「異年齢において互いに教えあうことが大事であり、そこから多くのことを学ぶ」と話していたが、互いに助け合い、尊重しあう姿が随所に見られた。

みんな同じではないからこそ学びあえることは、フレネ教育そのものについてもいえる。フレネは、教育の硬直化を危惧していた。一人ひとりの顔つきが異なるように、それぞれの国の文化に応じて、一人ひとりの教師それぞれに違った「フレネ」がある。子どもたち一人ひとりの異なる表現が常に実験的に表れ、探求されていくことを教師もともに大切にすることが重要であると。

ニース大学にいたミシェル・ロネは、フレネ教育運動の意味はモデルをつくることではなく、何千人という教師たちが交流することによって、学校全体を変え、教育全体をかえていくところにあると述べていた。

日本でも、この数年、新しく子どもを主体として個別化や協同化を目指した新しい学校が次々と誕生している。このような学校に注目しつつ、日本の中で、どのような学習環境を作っていく

のが今後の公教育に望ましいか、フレネ教育関係者だけでなく、異なる立場の人々と議論していくことが大切だと感じている。

参考文献

- 猶原和子 (2019)『幼小における市民性を育成する教育環境』、江戸川大学教職課程センター紀要「教職総合研究第5・6合併号、江戸川大学
- C. フレネ/石川慶子、若狭蔵之助訳 (1979)『フランスの現代学校』、明治図書
- C.フレネ/宮ヶ谷徳三訳 (1984)『手仕事を学校へ』黎明書房
- C.フレネ/宮ヶ谷徳三訳 (1986)『仕事の教育』明治図書
- フレネ教育研究会通信 (1983-1990)『フレネ教育研究会報通信』第01～10号、フレネ教育研究会
- 村田栄一 (1994)『授業からの解放—フレネ教育運動の試み』雲母書房
- 渡辺行野、小寺隆幸ほか (2019)『フレネ教育を巡るオランダ・ベルギー研修旅行報告』フレネ教育研究会
- De Nederlandse freinetscholen (2017)『Freinet Binnenste Buiten』、Freinetwinkel.i.s.m
<https://freinetbeweing.ng>
<https://www.freinetschool.be>
<https://www.parkschooldelft.nl>
<https://www.freinetschooldelft.nl>
<https://www.freinetschool.nl>
<https://www.nieuweregentschool.nl>
<https://www.pienterepiste.be>
 (2020年1月10日最終閲覧)

注

- 1) 筆者が参加したのは第30回大会でイタリアのレッジョ・エミリア市で開催された。その後2016年はベナン、2018年はスウェーデンで開催、2020年はカナダの予定である。
- 2) C.フレネ、/宮ヶ谷徳三訳(1966)「個別化学習について」『個別化学習とプログラム化』より。Mベルトロとフレネの共著の中のもの。
- 3) 波多野完治 (1985)「フレネ教育の現代性」『フレネ教育研究会通信第04号』pp.1-3
- 4) 宮ヶ谷徳三 (1988)「自由に表現する子どもたち」、『こころの科学』18号、日本評論社
- 5) オランダでは3歳までは、親や保護者向けに、4歳からは授業マニュアルがウェブ上でも公開されている。詳細はリヒテルズ直子『0歳から始まるオランダの性教育』(日本評論社)に書かれている。
- 6) 2019年12月1日に東京大学で行われた東京大学におけるピーター・モスの講演「新しい保育の物語—保育の質・倫理と政治・リアルユートピア」、および同年12月3日お茶の水女子大学での佐藤学講演「レッジョ・エミリア再考：日本と私へのインパクト：ピーター・モス教授との対話」での講演・および資料による。